

「久遠先輩……」

そつと、甘えるように名前を呼んで、ベッド投げ出された手首の方からゆつくりと擦り合わせて、右手に左手を重ね合わせていく。指と指が触れ合う。

それに触れて良いのかと好奇心に手を伸ばした猫のように、今にでも折れてしまいそうな頼りない細枝に触れるように。東郷は車椅子のロックがしっかりとかかっていることを確かめてから、身を乗り出して天乃の唇に唇を重ね合わせていく。

初々しさを感じるような、ただ触れ合うだけのキス。味覚にない甘い感覚が体に染み込んでいく。

ほんのりと香る柑橘系の清楚な匂い。

久遠家で使っている、シャンプーの匂い。

すぐ傍で見守る友奈の小さな吐息が、天乃の吐息に入り混じって聞こえてくる。そしてもう一度、キスをする。

唇同士の触れ合う感覚が寄り伝わってくるようにと、少しだけ長く、押し付けているようで、押し付けてないキス。天乃の手が少しだけズレて、指と指の間に割り込んでいく

「んっ……」

「っ」

キスをするたびに、唇が潤っていくのを感じる。離れるだけなら音もなかったキスは、ちゅぷりと、ほんの少し艶かしい音を出し始めて、触れ合うだけ、重ね合わせるだけだった手は、僅かに互いの手を握り合う。

(離れたくない……ほんの少しも)

呼吸をするたびに、天乃の匂いが鼻を通して流れ込んでくる。それは心臓を強く刺激し痛みさえ覚えさせるほど。

けれど、それが心地よくてたまらなかった。恋をしているのだと、愛しているのだと、自分の感情が火を見るよりも明らかで、熱くなっていくその感覚が嬉しくて。唇を吸い上げるように、少しだけ啞える。ほんの僅かにビクビクとした震えを感じて離すと、天乃の違えてしまった二つの瞳が見返してきていて

「……大丈夫」

「……………」

「ちよつと、驚いちゃった」

子供っぽくごめんねと謝るような、子犬の悪戯をしてしまったあとの愛らしい表情のような、そんな微笑と呟くような言葉に心臓が強く波打ったのを感じて、東郷は「最低です」と、心にもないことを呟く。

性的な行為においての知識を蓄えていくこの道は、自分から足を踏み入れたことだ。けれども、その原因は天乃で、今のような先輩らしからぬ子供っぽさゆえに、学んでしまったのだと、意味もなく八つ当たりを考えて、キスをする

「んっー」

唇ではなく、首筋に。

七月の半ば、その少し前の微妙な時期。けれども暑さゆえに滲み出てくる汗を、舐め取る。調べて見つけたとき、こんな行為は邪道だと思った。潔癖症ではないけれど、それは何か違うのではないかと。しかし、気づけば、そうしていた。

何の企みもなく、ただそこにキスがしたいと思って、キスをして、感じていた。

塩気も何もない、水滴。

なのに、体の奥底は満たされたように疼く。

「んっ、っ！」

吸い上げるようなキスをする、握りかけの手が途端に握り締められて天乃の小さなうめき声が耳元で零れ落ちる。重力によって垂れ下がっていった胸が、天乃の胸元と重なって、より密着していく

「っ、う」

噛み締めるように、舐めるように唇を這わせていく。

ぬちゅりとした音が小さく零れる

ちゅぷりとした空気を孕んだ音がする

その度にびくびくと天乃の体が震える

わざと音が出るように吸い上げて離れると、少しばかり怒った表情の天乃の瞳が、東郷を捉えた

「ばか」

「もう一度、体に教えた方がよさそうですね」

「やっ、ごめ……っんっ！」

悪戯っぽく笑った東郷がその表情とは裏腹に、本気なのだ気づいた天乃だったが、その謝罪は遅く、もう一度、今度は左側の首筋に吸い付かれて、呻く

くすぐったさと心地よさの入り乱れた不思議な感覚、嫌なのに求めてしまうその感覚に

天乃は東郷の肩へと手を宛がうが、吸い上げられ感じるむず痒さに力は根こそぎ奪われて。

「あ……うう……」

そんな姿を目の前で見せられる友奈は、顔を真っ赤にしながら、二人の交わりを見つめる。押し倒された―ベッドに引き倒したのは友奈だが―天乃の上に跨るような姿勢の東郷、激しく、熱っぽく、淫靡な音を立てる唇と、そこから伝い落ちていく透明の雫

天乃の口から零れだす声は、決して痛みや嫌悪感のあるものではなく、

それどころか、心地よさそうな声で。

表情は見たこともないような、艶かしさがあるように感じて

「んっ……」

友奈は思わず、息を呑んだ

「ん……」

まだ何もしていないのに、見ているだけなのに、体が次第に火照っていく。全身が内側から熱されていくように熱く、下腹部の内側が何かを求めて疼く。

「んっ……うう」

「んっ……んちゅ……」

熱っぽく二人の唇が重なる。淫猥な雫が似つかわしくもない可愛らしさで弾けて、目を引く子供の楽しげな笑い声のように感じて、友奈は目を向ける

「うう」

天乃のほんのりと赤らんでいく白い肌、零れ落ちる甘く蕩けた声、

ぬちゅりと響く淫靡なキスの音。静かな部屋で擦れ合わさる布の音

それがたまらなく、心を奮わせる。何もしていないからこそ、体を強く刺激する

混じりたい……加わりたい。艶がかった唇に触れてみたい、指で、唇で、交わりたいと切望する。しかし、友奈は何をどうしたら良いのか、それがまだ良く解らなくて。

飲み慣れない菓の効果が余計に出してしまうかのように、無垢な少女は本能の思うがままに、自分の下腹部へと手を伸ばす。

その瞬間――

「ひゅあぁっ」

無知ゆえ、無垢ゆえ、加減のない刺激が体を突き抜けて、友奈は思わず悲鳴のような声を上げてしまった。そんな友奈へと、東郷は申し訳なさそうな目を向けて

「こっちにきて」

「で、でも……っ」

邪魔になるんじゃないか、何も出来ないんじゃないか。自分では、天乃にあんな心地よさそうな顔も、声も、出させることはできないんじゃないか、そんな不安に駆られる友奈に、東郷は優しく笑みを向けて、天乃へとキスをする。数秒間の、濃縮された大人と子供の間、舌を使わないキス。離れた二人を結ぶ透明な糸は、艶かしく、光を映して途絶えていく

ごくりと喉が鳴る。飲み込んだのは緊張なのか、なんなのか。解らないまま、友奈は夢現な天乃の唇にキスをする。

「んっ」

あの日、初めてキスをしたときの事を思い出しながら、唇を重ねて、離れて。

熱っぽく零れるといきを重ね合わせて、また、キスをする。呼吸のための半開きな口はまるで、待っていたかのように抵抗なく受け入れてくれる。

ぬるりとした感触、ねっとりとした感覚、今あることが夢のようにも思えてしまうその幻想的な現実、友奈は問いかけるようなキスをする

「んっ、んくっ……んんっ」

目を閉じて、自分の舌先に意識を集中させていく。頭の中で天乃の口腔をイメージして、どこに天乃の心が逃げたのかを探してつくと、びくびくと天乃が震える。

口腔を蹂躪される。右に逃れた舌に舌が触れる。左に逃れた舌に舌が触れる。その逃げ場のなさは、悲しくもないのに、天乃に涙を浮かばせた。

悲鳴も何も、友奈は体の中に取り込んで、舌と舌を軽く触れ合わせて離れると、見開かれた二つの瞳が見えた。

「はっ……はっ……んんっ」

「んくっ」

意図せず掠め取った唾液を飲み込んで、友奈は自分の口元を拭う。

淫らだったと、友奈は思った。天乃はもちろんのこと、自分も今、まるで自分が自分ではないような感覚さえ覚えた。

ざらりとした舌の感触、ねっとりとした頬裏の感触、自分の感覚の一つが包まれていくそれが、たまらなく心地よかったのだ。

友奈は紅潮し、ほうけていた自分の頬に触れて、天乃の口元から零れていく唾液を拭う。

「友奈ちゃん」

「んっ」

東郷はそんな友奈へと声をかけて、唇を重ねる。

ゆったりと体重をかけて、少しずつ押し倒していく。その間も、唇と唇は押し合い、潰しあい、歪んで緩く閉じた柔肉を裂いて舌をねじ込んでいく。天乃の口腔とも似て、ねっとりとした空間、しかし、友奈に味覚はないのだが、甘さは少し控えめだと友奈は感じた。

大親友の東郷、その東郷とのキスはビターな甘さ、大人のような甘さ。互いの舌が互いを求めて絡み合う、一方的ではなく、折重なり合って、抱き合う。

「んっ、んちゅ……」

「んく、んっ……ふ」

自然と伸びた手と手を合わせて握り合う。ふと目を開くと、微笑むような瞳が見えて、友奈も笑みを浮かべて、離れる。つうーつと互いを糸が繋ぎ、次第と薄れていくけれど、絡み合った熱、甘い何かは体に染み込んで、心地よく体を温める。

「友奈ちゃん……」

「なに？」

「久遠先輩、えっちなだね」

「うん」

白く綺麗な肌は赤く染まり、絡み合って生まれた熱に浮かんだ汗が肌の艶かしさを増して、上下する胸、漏れる吐息の色っぽさに、友奈と東郷は同意見を述べて目を向ける。

(好きだ……私、本当に好きだ)

友奈は心の昂ぶりを感じ、歓喜に打ち震えそうな体を抑えて、笑みを浮かべた。

「やめ……お願い……もう」

弱弱しく声を漏らす天乃に、東郷は大丈夫ですよ。と声をかけると、制服に閉じ込められた乳房にブラジャーと制服の上から触れる

「ひうつ」

「可愛い声ですね」

「んっ……」

さっきまでも二人相手だったけれど、一人ずつだった。

なのに、今は服の上からではあるが、東郷に胸を触られ、友奈にキスをされ、二つ同時に刺激を受ける体は感覚を分断されていく。

胸は生地の本当に僅かな起毛感が無数の掠めるような感覚を生み出して、普段はなんとも感じないブラのストレッチ感がいやらしく感じる

キスはやや強引で、でも優しく手を取り合うような感覚で、逃げ道を塞ぐように舌は追い立ててくる。逃げ場はないと、諦めてと、その流れに準じてと、従えと。

離れると、意図しない熱の籠った自分のものだとは思えないような吐息が、零れ落ちる。

そして、口元を伝うなにかを友奈の唇が覆う

(なんか、もう……)

夏凜と東郷の二人にされたときと同様に下腹部の熱っぽさが増し、疼き、切なさが産み落とされていく。性的な欲求が自分の中でも高まっていくのを感じて、天乃が目を瞑った瞬間

制服の中に僅かな風が入り込み、下着に包まれた下腹部が、淫らに蒸れた淫猥な秘境が露わにされて

「……凄いい、えっちな匂いがする」

「っ」

「本当だ、凄いい……」

「う、嘘……っ」

二人が感嘆の声を漏らす中、天乃は「何も感じないわ」と、それを否定して首を横に振る。しかし、二人は淫らな匂いを確かに感じていて、天乃自身も、それが淫らな匂いだとは思ってはいけないけれど、自分の覆われていた熱が逃れていくのを感じていて

「止めて……っ」

羞恥心ゆえに顔を真っ赤にして、拒絶する

けれど、東郷は「ダメです」と言い、天乃の汗ばんだ太ももに舌を這わせる

「ひゃんっ！んっー」

目を向けても見えるのは東郷の頭だけで、ざらついた感触が汗を舐め取っていく感覚のみが、ビリビリと伝わってくる。いつまでするのだろう、どこまで行くのだろう、心地よさ、くすぐったさに混じった恐怖感が、天乃の頬をぬらして

「大丈夫ですよ、久遠先輩」

「友奈……んっひゅっ!?! んんっ!」

友奈は優しく声をかけると、撫でるように涙を拭って、キスをする。それと同時に内股から迸った感覚に天乃は声を上げたが、その嬌声は友奈の口腔へと飲み込まれて、消えていく。友奈の舌が、舌先に触れ、舌の表裏を舐めて、頬を舐めて、器を空っぽにすると、ねっとりとしたものが、友奈の舌を伝って流れ込んでくる。友奈がそうしようと思っただけのかはわからないけれど、自分のものはずなのに、自分のものじゃないような、そんな交じり合った感覚が広がって

「んあ……」

「んっ」

ゆっくりと離れていく友奈が見えた。

友奈はこくりと喉を鳴らすと、自分の口元の艶かしい艶を拭う。

そして、脹脛や、太ももなどの内股、あと少して足の付け根というところまで、自分ではない、誰かによる人工的な感覚が舞い戻ってきて。

「久遠先輩」

「や、お願い……やだ……」

東郷の顔が近づいてくる。自分の淫らさが流れ込んできてしまいそうな、そんな恐怖がまた、涙を流させる。けれど、東郷は容赦なく口づけをして。

何もなかった。ただ、東郷の唾液と友奈の唾液そして天乃の唾液が交じり合った口淫の特別なものが口元から垂れていくだけだった

「大丈夫ですよ、久遠先輩」

二度目の言葉は、東郷からで。優しい温もりが頬を包み込む

「東郷……」

「少しずつ、受け入れていってください」

わき腹を人肌が撫でて、へその窪みを指が塞ぐ開いたままの小さな手形が妊婦のおなかを撫でるような優しさでなぞっていく

淫らな感覚のないその愛撫は、愛撫と呼ぶに相応しくて、

「えへへっ」

右手が、友奈の左手と繋がる。

左手が、東郷の右手と繋がる。

腹部を撫でていたのは友奈の手だとそれで気づいたが、さらに新しく東郷の手が加わった両頬に、艶々しいにゆるりとした水気の多い感触が触れると

それは瞬く間もなくゆり動いて、天乃の耳たぶをパクリと啜える

「っ!」

不意を疲れた感覚に天乃の体は大きく動いて、友奈と東郷はそれにあわせて、服を脱がすことなくブラへと直接触れた

「あ、なたっ……たちやつ」

はむはむと耳たぶを甘噛みすると、天乃の言葉は途中で潰れて消えていく。

天乃の体は戦闘においては頑丈なのかもしれないが、ここまで緩くされると、とても弱いかもしれない。そんなことを考えながら友奈と東郷は握った天乃の手を天乃の顔の隣にまで持って行って、自分達の姿勢を少しだけ調節する。

「友奈ちゃん、私が先にやるね？」

「うん。私、もうちよつと……キスがしたい」

一番初めに感じたのがキスだった。恋人らしいこと。それで思い浮かぶ行為の一つ。友奈にとっても、接吻という行為は重要な交わりだったのだ。

「んんっ……ふっ、んっくっ」

真正面でも真横でもなく、ほんの少し傾いたキスは唇を割りやすく、舌をねじ込んだ友奈は身動きがとれず沈黙する舌を突いて挑発して……離れる

「んっ」

「っは……」

もつと蹂躪されるかと思った。もつと長引くと思った。だって、さっきまでそうだった。

そう覚えさせられた天乃はあまりにも短く薄い交わりに戸惑って、切なさが湧き出していく

「もつと、しますか？」

「え？」

「したそうな、顔してます」

唐突な誘いに天乃は開きかけた口を閉じて、目を伏せる

けれども、口を閉じれば友奈との開放的なキスが蘇ってきて熱っぽいからださがさらに熱っぽくなっていき、下腹部が余計に疼く

(したい……)

ごくりと、生唾を飲む。それも自分のものか友奈のものか、東郷のものか解らない。

そう思うと、不思議な何かが体を包み込むような感じがして。

天乃は羞恥心の残る、朱色に染まった表情で頷く

「……する」

「なら、舌、出してください」

恥ずかしげに答えるその姿に、友奈は東郷がいることも忘れて行為に浸りそうになったが、すぐに持ち直して、舌を出すようにと促す

天乃は嫌な顔はせず、ほんの少しおどおどとしながら、舌を出して

「んっ、っ」

友奈も同じように舌を出すと、まずはつつき合い、上下を交互に触れ合わせ、絡み合わせるようにして、ぱくりとくわえ込む

天乃の舌の腹を唇で咥え、唇で舐めていく

さつきまでは東郷と友奈の二色だったものが、友奈一色に切り替わっていく。

「んっ……くぁ……」

にゅぷりと解放された舌は友奈の唇の圧迫感、舌の微かならざらざらとした感覚の余韻を味わうように、言うことを聞かずに佇んで、呼吸のたびに腹部が動く、東郷の滑らかな手つきがより鮮明に感じられた

だが、余韻を感じるような余裕はなかった。腹部で蠢いていた東郷の手は、滑るように胸元へと入り込むと、ブラのホックの下を通って、胸の谷間に指を忍び込ませる汗ばんだ胸元はまだ隠されていて、むわっとした熱気が指からつたわって来る自分にも胸はある。友奈よりも、風よりも、もしかしたら天乃よりも。

だが、自分の胸ではない、そして愛おしい人の胸だと思えば、指に感じる柔らかな感触はたまらなく情欲を刺激して

「んっ！」

東郷はブラのホックを外して直接触れる。柔らかな乳房、プクリとした乳頭。

胸の形に手を曲げながら、破裂寸前の水風船に触れるかのような繊細な手つきで指先で汗ばんだアンダーバストの部分を反り上げるように揉みしだく

「ひうっ——んっ」

天乃の甘くふやけた、甘美な嬌声は友奈のキスによって飲み込まれていくが、東郷はもしかして、と、使い慣れたパソコンのマウスを操作するように、胸を驚掴みにして、人差し指で可愛らしく隆起した突起を押しつぶす

その瞬間、天乃の体が大きく震えて

「んんんっ！」

「わわっ」

友奈とのキスでも解るほどに悶えて、とっさに友奈は離れる

「っは……はっ、はぁ……あっ」

「久遠先輩、胸……弱いんですね。やっぱり」

夏凜と責めたときはまだ確証がもてなかったが、ここに来てそうだと確信する

東郷の弱いという言葉が性的な行為においてのものだという把握は容易で、

天乃はその問いには答えず、赤い顔を逸らす

「……友奈ちゃん、服を脱が——」

「よ、弱いわ……弱い、から……」

悪戯のような意味はなかったのだが、何かされると思ったのだろう。

正直に性感帯であると答えた天乃の態度に、東郷は情欲をより刺激されながらも、何とかその衝動を飲み込んで、鎮めていく

「なら、もつと優しくしますね」

東郷はそう言うと、ゆっくり服を捲り上げて乳房を露出させていく

シルクのような、降り積もった雪のような、綺麗な肌、
まるで職人が模り作り上げたかのように美しい形の乳房

脇役のように添えられながら、主役だと主張するように立つ乳頭
まだ経験の浅いそれは穢れを知らない白桃のような薄い色合いで、
「そ、そんなまじまじと……っ」

天乃は恥ずかしそうに言うが、東郷と友奈は恥ずかしがる必要なんて無いと思った。
陶器の女性像や、絵画の女性。衣服を身にまといていないそれらを見て、恥ずかしいと思
うよりも美しいと思うように、天乃の体も美しいと思ったからだ

「……東郷さん、同時、同時が良い」

「そうね、友奈ちゃん」

「ま、待って。貴女達一体何を……」

両手はすでに二人に繋がれ、下半身は動かない。そんな状況では抵抗も庇うことも何も出
来るはずもなく、二人が胸に、乳首に吸い付くことを阻止することはできなくて

「ひいっ！」

じゅるじゅると音がする。

吸い上げられていく、絞り上げられていく。そんな感覚が胸元から激流となって快樂神経
を飲み込んでいく

「ひあっ、やっ、おねがっ……」

性的に弱い胸元からの感覚は、慣れていない天乃の体を強く犯し、
ビリビリとした淫猥な電流を全身に駆け巡らせて、下腹部へと募らせる

「んっふ……はあ……」

「んくっ」

ぬちゆりと淫靡な音を立ながら、離れた二人。唇からは情欲の名残が伝い落ちていく

母乳は当然ながら出てくることはないが、まだ自分が幼い頃、母にしてもらっていた授
乳行為を彷彿とさせるようなその感覚に、友奈と東郷は燃え滾った情欲が押さえ込まれて
いくのを感じて、息をつく

「はっ、あ……んんっ……」

けれども、天乃の淫らな姿はそんな平和な余韻など吹き飛ばしていく

東郷と友奈は自分達の唾液を拭うように天乃の胸を愛撫する

揉むように、撫でるように、時には強く、時には掠るように、強く優しく

「んっ、やっ、胸……やっ」

さっきの激しさが抜けきらない天乃は呼吸を乱したままで胸は嫌だと言い切れず
押し寄せる快感の波に飲まれて溢れる声は、嬌声に包まれる

「久遠先輩、凄くえっちだ」

「ほんとうね……」

赤く火照った体、潤んだ瞳、熱っぽく艶のある吐息、

汗の浮かぶうなじ、滲んだ汗に張り付いた髪

美しく愛らしく、何よりも艶かしいその姿を前に、友奈と東郷はごくりと唾を飲む

東郷はちらりと天乃の下腹部、薄い桃色の下着へと目を向ける

天乃の下腹部を覆う下着は一部色が変わっていて、天乃がどれほど快楽に足を引かれたのが明るみになっていくのだと、東郷だけが理解して、微笑む

「久遠先輩、疼きますか？」

「っ」

「疼くって、ここ？」

聞かれた天乃ではなく、友奈が困ったように下腹部の辺りを撫でて、東郷に尋ねる。

友奈もそこまでは知らないのだ

「そうよ、友奈ちゃん」

東郷は友奈にも、天乃にもはっきりと答えて、その疼きは気持ち良くなっている証なのだと、もつと気持ち良くなりたいたいという気持ちの表れなのだと、そう、告げて。

「見て、友奈ちゃん。久遠先輩の下着が濡れてるでしょ？」

「……っ！」

「あ……で、でも、私も……多分、やっちゃった」

友奈は天乃が見ないで、お願い。と言いたそうな表情を浮かべたのを見ると、そういいながら、自分の患者衣の下を軽く下げて、自分の下着を二人に見せる

それにあわせて東郷も「そうよね」と、少し恥らいながらも、自分も同じであることを証明して見せて、苦笑する

「だから、みんなで……ね」

「でも、どうするの？」

「私と友奈ちゃん、久遠先輩の胸と下腹部を責めるの。下腹部は、下着の上から、中央の人差し指くらいのラインを、指のおなかの部分で擦ってあげるのよ」

「が、頑張ってみる」

「久遠先輩には、それを私達二人にやって欲しいんです」

「そ、そんなこと……」

「私は友奈ちゃん。友奈ちゃんは私。それぞれにもやれば、大丈夫です」

「な、為せばたいい何とかなる。よね？」

「その言葉をそんなところで使わないでっ」

「ごめんなさいっ」

思わず口にした勇者部五箇条を怒られて——本気ではないが——少し萎縮した友奈は東郷へと目を向けて、とにかく頑張ってみるよ。と意気込みを語る

その友奈のやる気に満ちた表情に東郷は頷くと、天乃の手を自分のスカートの中、下腹部いた儀の上からでも僅かに感じる湿った箇所へと誘う

「あ、漏らしてる」

「友奈ちゃん。十回くらい、久遠先輩を——」

「ごめんなさい止めて」

「ここにいるみんなそうです。久遠先輩も経験しましたよね」

「させられたのよ……思い出させないで。恥ずかしくて熱出しそうだから」

東郷と夏凜の二人としたときのこと、沙織としたときのこと。それぞれの自分がされたこと、してしまったことを思い出した天乃は、これ以上ないほどに赤くなって目を瞑る。手を握られていなければ、顔を覆っていただろう。

「わっ、久遠先輩熱い」

「さながら蒸気機関ね。淫らな蒸気……なんて淫靡な列車なの。いわば淫行特急だわ」

「なんて無駄な頭脳なの」

恍惚とした表情を浮かべるみもペディア大淫辞典に、天乃は困り果てた表情でぼやいて友奈へと目を向ける

こんな子にはなっっちゃ駄目よと願われているような、そんな気がして。

(東郷さんみたいなのは……無理かなあ)

友奈も苦笑して、「ここに連れて行くんだよね？」と、疑問符を浮かべながら、東郷のように手を引き、自分の下腹部へと誘導すると、天乃の指がピクリと反応し、友奈の淫猥な入り口を弾く

「ひゃあっ!?!」

「あっ」

「うううっ」

完全に不意を突いた快感は何ものにも阻まれることなく真っ直ぐに友奈の神経を刺激し、甘くぬめった嬌声を上げた友奈は涙目で、真っ赤な顔で。腰を浮かせて天乃を見る

「い、今のっ、今の……ずっとされないとだめなの?」

「怖い?」

「怖いというか、東郷さん、だって、なんか……そのっ」

も、漏らしちゃいそうだよ。と、気恥ずかしそうに告げた友奈に対して、東郷は優しい目を向けて「大丈夫」と、囁く。耳元に口を近づけて、声ではなく、吐息が鼓膜を震わせているような、暖かな感覚が入り込んでくるのを感じて、友奈は「くすぐったいよお」と悶えて。

「可愛いわ友奈ちゃん」

「ううっ」

東郷はもう暴走しているのかなんのか、友奈でさえ手籠めにして蹂躪しようとしているような雰囲気であるのだが、正気なようで、「私ですよ」と微笑みながら、天乃の臍周りを優しく撫で、内股側に指を回しながら、太腿に指を滑らせていく

「ふっ」

擦るように、舐めるように、指と指の合間の凹凸で揉み上げるように、膝の辺りから、股の付け根まで。手の平の全体で、愛撫していく。

「あ、貴女……またっ」

夏凜のようにざらついていない手は滑らかに足を滑っていく、太腿の固い筋肉が解れていく、柔らかい肉が揉みしだかれて熱を帯びていく。股座にまで近づいてくる手がいつ触れてくるのかと、ドキドキする。なのに……東郷の手はギリギリで、触れないのだ

「東郷さん、私は……」

「しばらく好きにして良いのよ。友奈ちゃん。胸にいくなり、キスをするなり、私のようにするなり……美味しそうなわき腹に、吸い付いてみたり」

「こ、こらっ東郷！」

「……ん」

「友奈も飲まないで、美味しくないから、絶対。ねっ？」

特別、わき腹が弱いということはない。だが、それは擽り行為や、攻撃的な事柄に対しての態勢であり、そうではない行為における耐性があるとは限らない。氷は水では時間がかかるが、お湯であれば瞬く間に溶けてしまうように、ほんの少し条件が変わるだけで、効果は格段に変わってしまうこともあるのである。

「ごめんなさいっ！」

「っ」

ぱくつと、擬音さえ聞こえてきそうな勢いでわき腹にぬるりとした感覚が張り付く。ゴム製の吸盤に吸い付かれたような感覚に生ぬるい感覚が付加されたそれは揉むように僅かな肉を味わう。

それだけなら、良かった。

しかし、友奈はこういったことに関しては初心だった

それなのに、好奇心が旺盛だった

今はもう、体も心も出来上がっていた

ぺろりと、シルクのような珠の肌を舐める

「ひゅっ」

微かにざらついた感触。指じゃない、間違はなく本物の舌で舐められる感触がじわじわと体の内側に浸透していく。

ザラリとした表面で、ぬちゆりとした裏面で、その力強さのある舌先で。

唾液を塗りたくるように、アイスクリームを掬い取るように。

「やっ……んっ」

ビクビクと体が震えだす

くすぐったいのではなく、全身を適温で暖められていくような、穏やかな温もり。

そんな不思議な心地よさを感じるからだ

「っ……んくっ」

いつも思う綺麗な声

時には綺麗で、お姉さん

時には可愛く、子供のよう

時には力強く、勇者のよう

そして今は、淫らに甘く大人のよう

「んっ、んく……んちゅっ」

自分がそんな声を出させているのだという実感がわくと、なぜだか心が舞い躍る。ドキドキとして、体は熱く、下腹部の疼きはより明確なものとなって、自分が性的な興奮状態にあるのだと語りかけてくる。

味覚の消えた舌が甘いものを感じる。

(なんでかな……心がそう感じる。気がする)

暇をもてあましていた手は天乃の臍周りに馴染ませて、震える体をその手に感じながら時々、淫みに指をはめ込む。小さく聞こえる嬌声が、止めてと願う震えた声が、情欲をそそる

「高まつてきたね、友奈ちゃん」

「東郷さん……」

「いくよ」

東郷の微かな掛け声、今ならその言葉が意図することがわかる気がして。

腹部を愛撫していた手を下へと下げてシミの出来た薄桃色のクロッチ部分を指でなぞる

「ひっきゅっ」

「ひっ」

「んっ！」

東郷は指が友奈の指とぶつかった瞬間、第一関節を少しだけ曲げて挿入とはいえない挿入をした——その瞬間。

天乃のじゅくじゅくと不快感さえ感じそうな淫らな溜り場が侵され、ぐちゅりと沈み込むような刺激が一気に駆け込んできて、体が強く痙攣する。その瞬間、友奈と東郷の導きに従った手先がクイツつと起き上がり、仕返しのように二人の陰部を穿つ

「はっ、っあ……」

過呼吸にでもなったかのような息苦しき、なのに、心地よさが抜けていかずに体内で燻るビリビリとした感覚は頭の天辺から足先まで満遍なく過激に送り、その一筋の雷の周囲から波状した快感がじわじわと体に染み込んでいく

沙織の時に感じた、あの快感

自分の力が及ばないと絶望させしそうな感覚

「あ、うう」

それは恐ろしくも——心地よくて。

「はっんっ……」

友奈も同じだった。心地良いけれど。辛そうな表情

まだ無垢ゆえの嬉しく、幸せな快樂の苦しみを味わう

熱の籠った愛欲に浸った重い吐息が零れ落ちる

項垂れたように下を見ると、涙目の天乃の解れた表情が見えた

——だから。

「んっ」

「んうっ」

キスをする。

艶がかった唇を重ね合わせて

粘ついた愛欲に包まれた舌を絡めあうのだ

私はこんなにも愛しているのだと。互いが互いに訴える

「……そうか、そうなのね」

参考のために見た画像や動画の数々

そのどれでも、手で性の祠を穢しながらキスしているような描写が多く見られた

見栄えのためだと思った。暇を持って余しているような交わりはつまらないからと、ただ、

そうしているだけだと思った。

けれど、違うのだ。

快樂に晒された淫らな表情は、とても愛おしいのだ

頭の中を空っぽにしていたとしても、体が勝手にそうしてしまうのだ

「……………」

「んっ」

「んくっ」

さつきは愛らしく思えた二人のキスが、早く空いてくれないかなと切なく思う。

自分もしたいと、心が求めて下腹部が疼く

「ゆ、友奈ちゃんっ」

「ふえっ——んっ」

名前を呼んで離れた友奈とキスをする

唇と唇を押し付け合い、開いて、夫婦の営みのように熱烈に舌と舌を絡め合わせる

ぬちゅり、びちゅり、くちゅり……

淫靡な音が部屋に流れ、天乃の熱っぽい吐息が合わさっていく

「っは……あ」

雫が伝う。愛欲の歡喜の涙が口元から滴り落ちる

その流れのままに、東郷は天乃と唇を重ねて、友奈と育んだ愛情を流し込んでいく

「ん……んくっ」

ねっとりとして粘ついた思いが流れ込んで、抵抗なく体が飲み込んでいく

下着越しでも指先が艶々とした淫欲に沈み込んでいくその蜜壺に、友奈と東郷は人差し指を這わせる。そのたびに、天乃の体が快樂に震えて、友奈と東郷の情欲に膨らんだ陰核を穿ち、恥ずかしげもなく快樂に打ち震えた嬌声を二人が漏らす

「ふっ…っ、んんっ」

「んっ、んくっ」

「んちゅっ」

数秒ずつ、そんな取り決めをしたわけではないけれど、餌を強請る雛鳥を前にした親鳥のように、忙しなく、交互にキスをする

求めているのは誰だろうか

友奈か、東郷か、天乃か……

唇のふれあい、舌の絡み合い、奏でる音は熱烈で淫靡な狂想曲

それはまさしく幻想的で

それはまさしく獣のように狂っていた

けれども三人の心は、情欲は奮い立つ。

「んちゅっんっ！」

東郷の手が下着の中へと割り込み、悅樂の蕾を抓んだ瞬間、それそのものが脳の快樂であるかのように天乃の体内を快感が突き抜けていく

友奈の手も追うように忍び込み、ぴったりと閉じた陰唇をなぞる

指先にはまだ産毛ほどの感触しかなく、蒸れた淫らな愛欲がまとわり付いていく

「んっっ、あっは……んんっ！」

「ひあっあっ、んっ」

「ふあっ、あんっ」

キスする余裕が吹き飛んで、離れた口元から唾液が滴り、媚声があふれ出す

押し殺すことができない、呼吸さえ出来ない

友奈の手と、東郷の手が天乃を抱くように繋がって

友奈の膨らみかけの胸と、東郷と天乃の豊満な胸がぶつかり、押しつぶしあって混ざり、

双乳の先で、いつか花開く蕾が押し潰れていく

悅樂の波が停滞していく。ジェットコースターの頂点までの道のりのような、焦らされる

感覚が募ってきたのを感じて、東郷が「もうすぐ」と呟く。

それがなんなのか、友奈も天乃も解って、また漏らしてしまっているのではないか、と天乃は恐怖を感じたけれど、染み込む愛樂の淫靡な波に逆らうすべを知らなくて。

「はあっあっ、んっ」

二人の愛が育み産み落とした悅樂の湧き水が、天乃の腕を伝っていく

鼻腔さえも淫らな空気が入り込んで、ぼーっとしそうになるたびに心地よさが突き抜ける

眠りかけた頭に響く目覚ましのようなその一撃に、三人の緩んだ蛇口は淫水を迸らせてしまふ。

肉欲にまみれた熱気が体を包み、内側から湧き上がる情欲が押し込まれ、逃げ場を求めて淫猥な想いの依り代へと集っていく。きゅんきゅんと疼く。という良く解らない感覚表現が、そういうことだったのだと感じると共に、東郷は大きな二房の実りを揺らして体を仰け反らせる

「んっ、っあっひっ」

一人での予行演習。散々やった。天乃に少しでも教えられるように、自分が一人で乱れてしまわないように。

純粹無垢だった自分の頭の中も、心も、体も。誰にも見せないパソコンの中に鍵付きで透明化させたファイルの中身のように淫らなものへと染め上げた
なのに――

「こんなっ」

大親友の愛おしい二人との交わりは、そんな努力をあざ笑っていた
無駄だよ。と、諦めなよ。と

「ああっ、んっっあっ」

天乃の淫らな声、艶かしく主張する唇、浮かんだ汗に張り付く髪、

露わにされ、自由になつて悦びに踊る形の良い乳房と、隆起した乳首

胸元まで引き上げただけの制服はその美しく繊細な料理のみごとなアクセント

あれこれと考えていた頭の中が溶けて行く

天乃の指が下着越しでありながら、淫らな想いの訪問に応えてしまう

それは友奈も同じで。

友奈の小さな指が天乃の陰唇に入り込んで、キュツと挟み込まれていく

口腔よりも温く、優しく、粘ついた入り口

その先にある陰核と呼ばれる誰しもが持つ性感帯を東郷の指が傷つかないほどの優しさで。けれど、気をやらせるには十分な絶妙な感覚で天乃の性欲に柔な体を抉る

「んんんっ!!!」

天乃の口がきゅっと閉じられて、押し殺された媚声が上がリ、あわせて動いた天乃の指に弱点を擦り上げられた友奈と東郷もまた

「ひやああああんんっ」

「んんんっ!!!」

二人同時に、いや、三人同時に快樂の果てへと突き落とされていく

体の力が抜けた二人は天乃の両手に跨るように倒れ伏し、意図せず挿入された指の心地よさにまた、微かな絶頂を覚えて喘ぐ

「はっあ……あ、う」

「はーっ、はーっ……んっ」

「う、うごか、ないで、ください……」

それぞれの膣口に指が入り込んだまま、悦楽の燻る体がまた果ててしまわないようにと東郷は友奈と天乃に呟く

口元から零れだす唾液、下腹部から流れ出ていく悦楽の涙

それを拭うことさえ億劫なのに、まだまだ淫らに舞いたいのだと心が切望する

「これが、えっちだよ……友奈ちゃん」

「う、うん」

友奈と東郷、友奈と天乃、天乃と東郷

それぞれの体が密着して、熱っぽい吐息が零れ重なり、空気を満たす

誰が言ったわけでもなく、伸ばした舌で、三人一緒に、大人な味わいのキスをする。

「好きです……久遠先輩。好きだよ。東郷さん」

「私もよ。友奈ちゃん。久遠先輩」

「ええ……私も」

三人はしばらく、そのまま動くことはなかった

∩ END ∩